えられるのではないだろうか。

また，これらのなかには当然のことながら天明飢饉と区別しがたいものもある。たとえば，熊谷市下奈良の豪農であった吉田宗敏の父宗敬の「吉田宗敬墓碑」は，浅間山噴火のみならず，天明から文化期までの事績を網羅している。また，越谷市瓦曽根の照蓮院にある「宜秋雲児自休居士墓碑銘」は，中村重梁の一代記の内容を呈している。本書ではいかなる災害かを基準に分類しているが，この例のように顕彰や築堤・改修記念などの建立目的で分類し直し，金石文の内容を再検討してみることも必要であろう。

火山災害の碑に分類されたなかで，幸手宿の有力者21人が窮民に70日間ほど食を供したことを讃えた幸手市正福寺の「義賑窮餓之碑」は，短文ながらも噴火の様子などを簡潔に記し，興味深い内容である。

旱魃災害の碑は5点と少なく，承応2年(1653)，明和8年（1771），文政4年（1821），文政9年（1826）の旱魃に関する碑である。承応2年から数えて二百三十三回忌にあたる明治19年に建立された「水行様」，明和8年の旱魃について記した坂戸市泉町の「粟生田堰改築記念碑」と久喜市江面の久伊豆神社「手水石の碑」，比企郡滑川町伊古神社の「雨乞碑」は文政4年，越谷市久伊豆神社の「久伊豆明神感應之碑并銘」は同9年の旱魃の碑である。

地震災害の碑4点は，いずれも安政2年の江戸大地震に関するものである。このため，埼玉県では南部に分布していることが指摘されている。

疾病災害の碑は2点。うち1点は天保6年（1835）痘瘡（天然痘）の流行を防いだ医者を顕彰した秩父郡吉田町上吉田の「静斎新井處士之墓」である。もう1点は同8年の比企郡小川町大塚の「天王社の碑」であるが，風化が激しく採拓できなかったという。それでも一部解読されており，著者の苦労がにじみ出ている。

以上のほか，本書には前述した奥貫友山のほか，明和4年の治水に資財を投じて「徳川実記」にも記された新井孫助（草加市氷川町），天保飢饉に際して「贍民録」を著した福島耕八（鴻巣市，勝願寺墓地）など，注目すべき人物の金石文が数多く収録されている。これら地域の偉人・功労者の墓碑は，学校教育の教材としても活用しうるであろうし，活用されているものと思われる。

しかし，災害碑建立の目的には個人の功績を美化して讃えたものが多いと考えられ，必ずしも客観的な内容とはいえない一面もある。また，後年に建立された例も多く，これらは同時代資料ほどの信憑性に欠けるきらいがある。したがって，金石文の内容を鵜呑みにすることはできない。とはいえ，被災者あるいはその子孫の災害碑を建立した意図を正しく把握し，事実としてよりも，災害に対する意識を考察する材料として，金石文は貴重な資料となりうるかもしれない。すなわち，環境認知論による災害研究の資料として解読しうる可能性を含んでいるのである。

歴史災害の研究視野を広げるうえで，本書のような地道な収集調査による資料の蓄積がさらに必要であり，これを成し遂げた著者に心より敬意を表したい。

（小野寺淳）

**金田章裕著：『古代荘園図と景観』**

東京大学出版会　1998年10月

A5判　368頁　本体6,400円

本書は著者の古代荘園図研究に関する論文をもとに，研究全体における位置づけを加え，まとめられたものである。出版から時間を経ての紹介となってしまったが，本書に関連して，『古地図からみた古代日本―土地制度と景観―』が1999年8月に中公新書として出版され，一般には知られることの少なかった古代の大縮尺の荘園図について，興味深く解説されていることもあわせて紹介しておきたい。

本書の表題にもある「古代荘園図」とは，現存する古代の地図の総称である。日本に伝存する8・9世紀の古地図は，詳細に土地や景観を表現した大縮尺の地図であり，荘園の田畠などを表現するために作成されたものが多く，一括して「古代荘園図」と総称されている[1]。本書の構成は，序章が「古代荘園図への接近法」，第1章が「古代の土地管理と荘園図」，第2章が「古代荘園図の景観表現」，第3章が「古代荘園図の機能と表現法」，第4章が「古地図の機能と表現対象」となっている。

序章では，本書および著者の研究的視角について説明がなされる。まず古地図研究における古代荘園絵図の位置づけを整理し，それまでの「中世荘園図の一要素」としてではなく，「古代の地図群の一部」として扱うことを確認している。このことが本書の重要な意義でもあり，全体を貫く姿

勢と言えよう。

次に古代荘園図研究の流れを3期に分けてとらえ，現在が属する第3期を，精密な写真集の公開や古代日本の古地図にかかわる情報を集成し，その性格や特性の解明を目指す研究プロジェクトに基づく段階とする。この第3期の研究動向の軸として，①古代荘園図研究の現時点での集成・深化と，②古代の制度，各種文書・地図類の中での検討，③東アジア世界での比較研究，④考古学・地形環境との関連という論点を挙げる。さらに著者自身がその第3期に参画するために，古代の土地制度をはじめ，他の地図類，経済的状況，景観認識など，同時代の各種事象の状況や推移との関連において理解する姿勢を「文脈論的な視角」としている。

第1章においては，古代の土地管理システムの中での荘園図の位置づけを検討している。著者は規則的な地割形態である「条里地割」と，条・里・坪の区画による土地表示システムである「条里呼称法」という2つの要素からなる，現実的もしくは現実にあるべき実体を意味するものとして，「条里プラン」の用語を使用する。これは「条里制」という用語が，従来律令の基本政策の1つである班田収授の実施に直結して考えられてきたことから，班田収授と異なった成立時期および主要因を有するシステムとしての区別を明確にするためである。

ここでは，古代荘園図の表現内容の主要な部分を占める条里プランと小字地名的名称が対象となる。その場合，小字地名的名称とは個別的・固有名的名称が付されたものを指す。まず土地表示システムの一環として，小字地名的名称が果たした役割を確認するために，小字地名的名称がどのような土地に付され，それを土地表示に用いたのはいかなる必要性によるものか，という論点が問題とされた。結果として，輸租地に付されたもので国家の直接的管理下にあり，律令の下では校田の対象となった土地であった。一方，不輸租・不輸地子である土地に対しては土地利用上の田・畠・林などといった種別とは関係なく，単に所有主体や土地利用・植生が明示されるにとどまる。

そこで小字地名的名称とは，8世紀ごろにおいて田ないし圃に付された，個別的・固有名的な名称であると再定義している。本来は土地表示のため，あるいは土地の記録・管理の必要上設定されたものが，同時にその対象となる土地の性格を示すことにもなった。土地表示システムの一環としての機能と，国家の直接的管理下にある土地を示すという機能の両者をあわせ有していたとまとめられている。

次に2節では，条里プラン完成以前と以後の荘園図の具体的事例をそれぞれ分析した。古代荘園図と一括している地図にも，作製目的が校班田と関係なく，墾田の場所を明示するために作製されたものもあるなど，多様な由来があることを整理した。また条里呼称法が導入されて条里プランが完成し，班田図が整備される以前において，必要に応じて「国司図」と呼べるような，寺田や墾田が設定されたり，班田収授の対象外となるような土地の多い部分について特別に調査し，作製した地図の存在を指摘する。

第2章では，古代荘園図の現地比定と図自体の景観表現を主として，個別事例の詳細な分析が行われる。ここでは，著者によりすでに検討された[2]図以外のものとして，越中国射水郡および同砺波郡の東大寺領荘園図，大和国額田寺伽藍並条里図，弘福寺領讃岐国山田郡田図が取り上げられている。

1節では，東大寺の越中国射水郡内の開田地図を検討する中で，8世紀における野地の占定と開拓の実態，その土地の認識ならびに開田地図における表現といった問題が論じられる。条里地割の分布や遺称地名による従来の現地比定が不可能な同地域において，手法として，地形条件に加え水系パターンを手がかりに現地比定を行う。さらに湧水と崖の位置などの微地形条件も含め，比定案の確認がなされ，東大寺による空間占拠と開拓の様相についてその流れを描き出している。

2節では，古代の砺波郡全体について概観した上で，東大寺領荘園図の現地比定が行われる。南北に接する3荘を描いた地図から，図に記載された地形条件との整合性を検証し現地比定を行い，また復元された自然環境からも確認を行う。さらに周辺地域を含めた開発の過程にも言及し，荘園の近接性と，水系ないし水運による結び付きが重視された経営システムの管理体制の変化を想定している。

3節では，東大寺領荘園図以外で現存唯一の布製古代地図である額田寺伽藍並条里図を，校田過程における寺領確定のための図と位置づけ，図の構成や建物，土地利用，地形条件等を検討することにより，景観の実態とその形成過程や寺領の経営について説を展開する。絵図的な表現内容の概

要を抽出した図のみでなく，復元された条里や地形条件，土地利用をふまえて景観の概要図が作成されている点が興味深い。

4節では，弘福寺領讃岐国山田郡田図のうち，特に南地区について描かれた郡境や条里プランの実態と比較した。図中の耕地面積の分析と，地下遺構の調査結果から得られる旧地形条件などをつきあわせ，現地比定を行う。また図中の不明な地点表現「壟」の実態についても明らかにした。

第3章では，古代荘園図が果たした機能やその表現法の特性などを取り上げる。まず阿波国の2枚の東大寺領荘園図を，古代荘園図の成立や機能をめぐる論点に直接かかわる表現内容を有すると評価し対象としている。その上で図の表現内容の再検討を行うことにより，荘園図自体の形成過程を明らかにする。

次に，様々な古代荘園図の表現内容を分類し，構成要素それぞれの詳細な検討を行った。その結果，古代荘園図において，多様である絵図的・絵画的表現は必須の要素ではなく，基本となるのは方格に分割された「地片標記」のコンセプトである条里プランや，文字による標記の方であると指摘する。この点を中世荘園図との根本的な相違点として挙げる。つまり古代荘園図の特性は，細分された地片・景観の再集合のコンテクストを基礎とする基本構成を持ちながらも，連続的な景観の絵図的表現のコンテクストとの対立・併存・複合からなっていることであると論じる。

第4章では，古代荘園図を含む日本における古地図全般の各種の機能と表現対象が整理された。最後に日本の古代荘園図と類似性の高い古代ローマの地籍図が，比較対象として取り上げられている。

以上のように本書は，複数の視点からの現地比定案の実証など，各図の詳細な検討が繰り返される。しかしそれにとどまらず，著者がこれまでの古代の土地や景観に関する研究の中で蓄積してきた豊富な事例研究の成果を加え，古代荘園図全体のまとめと方向性が示されている。この点で古代や歴史地理を研究する人だけでなく，地理学全体のテキストとして不可欠の一冊であろう。

また本書の背景には，共同研究での多角的な調査がある。著者が「あとがき」において挙げているのは，高松市弘福寺領讃岐国山田郡田図をめぐる調査，『日本古代荘園図』として出版されている共同研究プロジェクトである。関連分野との共同研究において地理学分野の果たす役割という点でも，示唆の多い書となっている。さらなる課題と新たな可能性の模索という宿題を当分野に投げかけた著書であると受け止めたい。

（山近久美子）

〔注〕

1） 金田章裕・石上英一・鎌田元一・栄原永遠男編『日本古代荘園図』東京大学出版会，1996，序文

2） 金田章裕『古代日本の景観―方格プランの生態と認識―』，吉川弘文館，1993